

## アメリカ歴史地理学の展望

辻田 右左男

### 序

「歴史のない国」といわれるアメリカに、歴史地理学の発達を期待することは、がんらい無理な注文である。最初の植民（一六〇七年）から数えてもわずかに三五〇年、もし合衆国誕生の年（一七七六年）を起点とすれば、二〇〇年足らずの浅い歴史しかもたないこの国には、歴史地理学のテーマになるような事実はきわめて僅少であったといわねばならない。従ってごく最近まで、アメリカでは、地理学の分野のなかで、歴史地理学は正当な位置を与えられていなかったとしても、それはすこしもふしぎではない。

第一、「歴史地理学」Historical Geography という概念そのものが、地理学者の間でも正当に理解されておらず、歴史地理学を問題にする時、まず「地理学の歴史」History of Geography との異同から解明しなければならぬという状態であった。このことはアメリカ地理学協会 (A. G. S.) の「百年史」(Geography in the Making) を編んだライト Wright の著作を見ても明らかであるし、同じ編者による「アメリカ地理学の展望」(American Geography, Inventory and Prospect) のなかで、クラーク A. H. Clark が担当している「歴史地理学」の項でもよく示されている。このように概念あるいは名称の混乱 (confusions in title) を回避しなければ、歴史地理学がなれてあ

るかを説明し得ない段階では、アメリカにこの学問の盛行できない事情もほほ推察される。

もちろん、国土の歴史が新しいことと、歴史地理学の発達とは切り離して考えることもできる。たとえ北アメリカでは問題にするようなテーマが少なくとも、アメリカの地理学者が舞台を他の大陸に求め、近世から中世古代へとさかのぼって、さまざまの歴史地理学の問題に手を染めることをさまたげるものではない。往々それは地理学史に偏向する傾きもあるが、ヨーロッパ諸国やアジア諸地域の歴史時代の地理的事実の復原を志した学者はなかつたわけではない。それゆえに、いちがいに、アメリカには歴史地理学が発達していきなるときめつけてしまうのは誤まりであるが、少なくとも、北アメリカを対象とした歴史地理学的研究はまだようやくスタートを切ったばかりであると評しても、たいして言い過ぎではないであろう。

以下、この国では歴史地理学がどのように定義づけられているかを見た上で、過去および現在の歴史地理学的業績の若干を紹介してみよう。

### 一、歴史地理学の意味

アメリカにおける歴史地理学の概念の把握のしかたについては、イギリスや日本のそれと多く異なるところはなしい。この学問の分野におけるアメリカの後進性を理解しているゆえに、アメリカ地理学者の歴史地理学に対する考え方は、極度に消極的であり、よくその節度を守っている。

前記ライトおよびクラークの記述を見ても、そのことがよく分かるが、ウイスコンシン大学のハーツホーン教授の力作「地理学の本質」(The Nature of Geography, 1939)においても、この問題はきわめてひかえ目に取り扱われている。これら三つの書物を通じて見られる歴史地理学共通の考え方は、過去のある時代を一つの時点で切った特

定の地域の地理的現実の描写あるいは復原であることに間違いはない。過去のある時代といっても、それはいつごろから始めてよいのか、またいつそれが終るのか。つまり先史時代と現在とを両極として、歴史地理学の素材はどのような時間的ひろがりの中に見出されるべきであろうか。これについてはクラークがかなり詳細に論じているが、これによれば歴史的文獻の存在する歴史時代に限らず、考古学的遺物の現存する先史時代の事象もまた歴史地理学の対象となり得る。

しかし歴史地理学の中心領域といえば、やはり歴史的文獻の利用できる時代、特に近世以後であつて、現在に近いほど実地検証という有力な方法も援用することができる。しかしようやく近世になって生誕したアメリカを舞台にすれば、近世以前の歴史地理学は成立しないことになり、コロンブス以前のインジアンのことや、伝説的なヴァイキングの問題などは歴史地理学の領域を逸脱した考古学民俗学の問題であるか、あるいはラッセル・スミスのような単なる好奇心の問題でしかない。

短かい期間ではあるが、近世以後のアメリカを背景とした場合、時代が新しいだけ史料も豊富であるし、その保存状態もよいので、歴史地理学的研究は、相当の効果をおさめられるはずである。しかし今日まで比較的この学問が等閑に付されていたのは、歴史が新しいというハンジキャップがあつたからである。それにごく最近までアメリカ人の地理学者のなかには、古い歴史を誇るヨーロッパからの移住者が多く、かれらの目から見れば、ヨーロッパの祖国とくらべてアメリカは文化的にあまりみすばらしく見え、アメリカの歴史をわざわざ問題にしようという人が少なかったためでもある。

とにかく、第二次大戦ちゆうに、国民の勇氣を鼓舞するために、アメリカ史が強調せられ、教育的にも歴史教育が

重要視されるまで、一般に歴史地理学は日の目を見なかったと評することができる。少なくとも、地理学史とは別に歴史地理学という名称が唱えられはじめたのは、割合に新しいことであるが、実質的にこの学問に該当する偉大な研究が、二十世紀以後いくつか出現している事實は注目されねばならない。ことに前述のようにアメリカ以外の大陸についての歴史地理的研究は必ずしも少ないとはいえないが、ここではアメリカを舞台とした二、三の歴史地理学的研究を俎上にあげ、かつ現在における研究の若干を展望してみよう。

#### 四、歴史地理学の先駆者

歴史地理学という名称は冠していないが、一八七四年に「人力によって改変された地球」の名著を送り出したC・P・マーシュがアメリカにおける最初の歴史地理学者として高く評価されている。すこしおかれて「アメリカにおける自然と人間」を物したN・シェーラーもマーシュと同系列の業績を残したが、イギリスの歴史地理学がすでに百年以上の経歴をもつのに対し、十九世紀中のアメリカの歴史地理学はこれら二著をのぞき、まったく不毛であったといわなければならない。

しかし二十世紀をむかえると、アメリカにおける人文地理学の創始者ともいうべき例のセンブル女史が、歴史地理学方面にも輝かしい記念碑をたてている。ルイズビル出身の女史が、当時女人禁制であった大学の門を叩いて、ドイツのラッツェルに傾倒したことは有名であるが、彼女の婦米第一作が「アメリカ史とその地理的条件」(一九〇三)であったことは注目される。彼女がドイツで習得した環境理論をまず母国の歴史に適用しようとして、生み出されたのがこの書物であり、彼女の代表作、ラッツェルの「人類地理学」のアメリカ版といわれる「地理的環境の影響」(一九一一年)はこれより十年近くおかれて刊行されたことに大きな意味がある。さらに一九三一年いくぶん余技の境に

入っていたギリシア・ローマの古典を自由に駆使して、「地中海地域の地理」を書いているが、これも「古代史への関連」という副題がついているように、まごうことなく、歴史地理学であった。

彼女の著作は環境論であり、その二つの歴史地理書は単に地理的歴史であるという酷評も一部ではなされているが、アメリカの歴史地理学を問題にする限り、彼女がその先駆者であり、最大の歴史地理学者の一人であったという折り書をつけることはできる。

センブルの「アメリカ史」刊行の年に、アメリカのいま一人の偉大な歴史地理学者であるブリナムが「アメリカ史における地理的影響」という書物を出している。かれもまた最初ラツェリアンであつたらしいことはその題目からも察せられるが、のちには環境論を反省するとともに、その視野もまた交通・農業などに拡大した。そのことは、かれの後続の論文を見れば明らかである。しかしいつも歴史地理学的な取り扱い方をしているのが、彼の論文の特色で、一九〇七年には「アパラチア山脈横断路―踏み分け道から鉄道へ」という論文を出し、同一〇年には「北アメリカの小麦栽培の発達」を論じている。

同じころ、「人間生態学」という言葉を創案したH・H・パローが、シカゴ大学を根城として大いに地理学史の重要性を鼓吹したが、これは歴史学専攻の学生を刺激したにとどまり、地理学の側からかれの後継者は出なかつた。しかし、かれが「イリノイ中部河谷の研究」で、広大な中央平原の開拓史に地理学を導入しようとした着想はすばらしく、当時不毛であつた歴史地理学という荒野の開拓者の役割を果たしたとすることができる。現在のアメリカの二大歴史地理学者の一人であるカール・サウアーなども、早速パローの分野をひきつぎ、一九一六年にイリノイ州の歴史地理学を、同二〇年にオザーク地方の歴史地理学を書いている。

#### 四、現在の歴史地理学

現在、アメリカにおける歴史地理学の最高峰としては、カリフォルニア大学のカール・サウアーがあげられる。名前の示すとおりかれがドイツ系アメリカ人であることはいうまでもないが、かれの歴史地理学は時間的空間的に非常に大きいひろがりをもっていることが特色である。

初期の作品こそ前述のようにイリノイ上流河谷の發達史とか、オザーク高地の歴史地理学など狹義の歴史地理学に限定されているが、その後の論文を見ると「メキシコにおける原住民の分布」「アメリカ農業の起源」「アメリカ東部湿润地方の集落」「アメリカ初期人類の地理的素描」「後氷期における環境文化」などのように、時代的には先史時代までさかのぼり、また地域もかならずしもある特定の土地に限らず、ひろく文化と環境、とくに植生と人間との関係を主として論じている。むしろ最近の傾向としては、歴史地理学から文化人類学に傾斜しているともいえるが、歴史時代における環境と当時の人間生活とを大きなメスで切りさげ、その相関性を解明していく点では、やはり歴史地理学の巨匠の名に価する。

サウアー C. O. Sauer が特定の地域から飛躍して、ひろく歴史時代における人間と環境との問題を總括的にとらえようとしているのに対し、あくまで地域に執着し、歴史地理学における地域性を強調したのは、いまは亡き R・H・ブラウンである。かれが現存すれば、サウアーとならんで歴史地理学における「普遍」と「特殊」とのすばらしい対立が見られたであろうが、一九四八年第一巻を出した名著「合衆国の歴史地理」の第二巻刊行直後に物故したことはおしまれる。

かれは一九三八年、十八世紀末から十九世紀初頭における大西洋海岸の地理の復原を試みるべく、まずその資料を

紹介し、同四三年に、「一八一〇年における東部海岸地域のすがた」という題目でこれをまとめあげた。特定の時期における過去の地理を的確に再現したという点で、この著作はアメリカの歴史地理学においても、新时期を画したものであるが、かれはさらに「合衆国の歴史地理」において、歴史地理的景観の推移という歴史地理学における、一つの重要なテーマと取り組んだ。これまた不振であったアメリカの歴史地理学の行手を示す大きな炬火であったが、現在かれの直接の後継者は見出されない。わずかに、歴史地理者としての、ブラウンの功績をドイツの地理学雑誌「ディー・エールデ」にも紹介したA・H・クラークがその流れを汲むものと解される。

もちろん歴史地理学は学問の性質上、専門地理学者以外の手によっても相当みごとな著作が出ていることは、わが国の場合と同じである。わが国でも歴史地理学の先駆者は坪井九馬三・内田銀蔵・吉田東伍・喜田貞吉・今井登志喜などの歴史学者であったことを思えば、アメリカでも歴史学、社会学の側から注目すべき著作が出ていてもふしぎではない。筆者の聞知するところでも、古くはF・T・ターナーの「アメリカにおけるフロンチア」(一九二〇)、スタンフォード大学の歴史学教授ウェアリの「合衆国、地図にあらわれたその歴史」(一九五五)などは、きわめて重要な歴史地理学の文献であるし、有名なビアード教授の著作のなかにもかなり色濃く歴史地理学的な記載が見出される。

その他、アメリカの農村の歴史地理については、地理学者よりもむしろ社会学者のリン・スミス、カール・サンダースなどの貢献が大きい。

そのほか作家の作品のなかにもピュリッツァー賞を受賞したビューレーの「古き北西部」、シャファアの「ウィスコンシンドームスデイブック」などの名篇があり、三十年の日子を費したカール・サンドバーグ Carl Sandburg

のリンカン伝には、十九世紀における小麦地帯・鉄道・原始林などの変遷を示す分布図をかかげるなど、この作家の歴史地理にかんする鋭い観察が随所に盛り込まれている。

##### 五、歴史地理学の将来

歴史地理学専攻という地理学者は比較的少ないが、それぞれ専門の領域のほか歴史地理学にも関心をもち、すぐれた論文を発表している学者の名称をひろいあげれば相当多数にのぼっている。わが国でも名前を知られているウィットレシー、G・トレワルタ、R・ホール、P・ジェームズなども歴史地理学にかんする論文を書いているし、S・ドッジなどは集落の歴史地理学で一派をなし、かなり影響力の大きい人であった。R・ホールがわが国にきて、「東海道の変遷」や「大和盆地」に手を染めたのは、実はドッジの影響であったといわれる。

ドッジ S. D. Dodge は、歴史地理学のなかでも「占居の継続」(Sequent Occupance)を強調している点が注目され、スタニスラウスキーなどは直接その流れをくんで「格子状集落の起源と拡散」を問題にしている。中央平原の開拓という事実はアメリカの歴史地理学に無限の課題を与え、土地利用(クラーク)・作物限界・政治的境界(S・ジョンズ、ドッジ)などの一面をとつても、歴史地理学的研究は成立する。この意味で、ひとたび、歴史地理学に関心が向けられるあかつきには、今後いくたのみごとな研究が生み出されるであろうことは想像に難くない。現に、アメリカの諸大学では、そのフィールドワークの一環として歴史地理学的な観察を重要視しており、「歴史なき国」アメリカの歴史地理学の将来は、かえって歴史の古い国々のそれをしのぐものがあることが予見される。